

第3回 東静岡駅南口県有地への「文化力の拠点」基本計画策定専門家会議 会議録

日時	平成28年3月23日（水） 午後3時から 午後5時まで
場所	静岡県庁別館9階第1特別会議室
出席者職・氏名	<p>◎伊藤 滋 東京大学名誉教授、早稲田大学特任教授 内藤 廣 建築家・東京大学名誉教授 寒竹伸一 静岡文化芸術大学大学院教授 石原和幸 (株)石原和幸デザイン研究所代表取締役 東 恵子 東海大学海洋学部教授 伊東幸宏 ふじのくに地域・大学コンソーシアム理事長、静岡大学学長 荒木信幸 ふじのくに地域・大学コンソーシアム企画運営委員会副委員長、静岡理工科大学名誉学長 石塚正孝 静岡県コンベンション・アーツセンター館長 藤田圭亮 (株)なすび代表取締役社長</p> <p>知事、難波副知事他</p>
議題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「文化力の拠点」への導入機能・規模イメージ案（たたき台）について ・ 「文化力の拠点」のレイアウトイメージ案（たたき台）について ・ 「文化力の拠点」活用案の提案 ～大学コンソーシアムの拠点機能形成の観点から～ ・ 外部空間の緑化の考え方・ポイントの提案 ・ 東静岡地区における「都市景観検討技術会議」（中間報告について）
配付資料	<p>資料1：第2回専門家会議（平成27年12月25日開催）における委員からの意見への対応</p> <p>資料2：施設のメインユーザーと導入機能イメージ</p> <p>資料3：「文化力の拠点」導入機能、規模イメージ案（たたき台）</p> <p>資料4：「文化力の拠点」のレイアウトイメージ案（たたき台）</p> <p>資料5：「文化力の拠点」活用案（コンソーシアム拠点施設、国際学生寮）</p> <p>資料6：外部空間の緑化の考え方・ポイント</p> <p>資料7：東静岡地区における「都市景観検討技術会議」（中間報告）</p> <p>参考資料1：「文化力の拠点」への民間による導入機能を期待する宿泊機能等に係る市場動向調査結果の概要</p>

【企画広報部長】 それでは、ただ今から第3回東静岡駅南口県有地への「文化力の拠点」基本計画策定専門家会議を開催いたします。委員の皆様には、年度末のお忙しい中を御出席いただきまして、誠にありがとうございます。開会に当たりまして、川勝知事から御挨拶を申し上げます。

【川勝知事】 年度末のお忙しい中、尊敬する伊藤滋先生をはじめ、委員の先生方、御出席賜りまして、誠にありがとうございます。

東静岡駅は、もともと貨物があったところでございますけれども、山側が市有地、そして海側が県有地ということで、東静岡駅全体を賑わいの空間にしていこうということで、一昨年、高階秀爾先生を委員長とし、芳賀徹先生や遠山敦子さん、また静岡市にも入っていただきまして、東静岡駅周辺を全体として一体的にするために、静岡市側、内陸側の方はスポーツを中心にした「スポーツの殿堂」、そして、海側は「文化力の拠点」をつくろうということになり、一体的にやっっていこうということでございまして、我々の方はそれを受けまして、私が最も尊敬する伊藤先生に座長を引き受けていただきまして、この間、ホップ・ステップ・ジャンプで、さすがに先生方の御意見が見事に集約されまして、3回目ではありますけれども、それなりにイメージができるところまで来たことを、大変ありがたいと思っている次第でございます。

もともと荒木先生を中心にいたしまして、大学コンソーシアムというものの拠点をつくりたいものだ。静岡県に20ほどの大学がございましてけれども、これらを一体的に、京都の大学コンソーシアムだとか、あるいは東京駅の近辺にも大学関係のものがいろいろと集積しておりますけれども、そうしたコンソーシアムを、駅前ということを通じて、広く市民に、県民に開放するというので、コンソーシアムの考えをここに入れると。

それから、東静岡駅周辺には、たくさん大学があります。東海大学とか、英和学院大学とか、県立大学とか、国立静岡大学などたくさんあり、大学生、特に留学生がたくさんいますので、その人たちの、青年たちのことも考えよう。もちろん、今でもグランシップがありますので、これはもう、日本を代表する様々な人たちが来ます。その近くにSPACの演劇場もございまして、世界の演劇の「都」というように、アヴィニョンでスタンディングオベーションが出るような、そうしたところがございまして。ところが、終わったら、行くところがないという状況です。真っ暗になりますから。そうしたことで、やはり、色々な演劇や音楽が終わった後、少なくともちょっとその余韻を楽しむために、食事をしたり、一杯いただいたり、そうするような賑わいの空間があった方がよいというようなことで、イメージはあったのですけれども、これをどういう形にするかということにつきましては、やはり、この方面の最高のプロ、何しろ日本の玄関口、東京駅を基本的に、頭脳としてアイデアを出された、そしてそれを実行されているのが伊藤滋先生であり、今はもうどこに出しても恥ずかしくないようなものになってきております。さらにまた、首都圏について、東京を中心にすばらしい構想を、伊藤先生、やっておられまして、そういうお忙しい中、静岡県のためにやっただけにしていることに対しまして、大変に感謝しております。これ

は実行するためにやっているものでありまして、ここで入れたものを、すぐ予算化して実践して行って、社会のためになりたい、何とかお使いになれるものにつくっていかうと、こういう心づもりでおります。

そんなことで、時間は限られてはおりますけれども、皆様方の御意見は、これを研究普及をいたしまして実行いたしますので、今日、限られた時間でございますけれども、何とぞよろしくお願いを申し上げます。

石原さん、今日はお忙しい中を来ていただきましてありがとうございます。何しろ、富士山のために生まれたような人ではないかなというように思っております。人工物については伊藤滋先生、しかし、自然を生かすことについては、やはり石原先生ではないかというように思っております。今日は何かアイデアもいただけるというように聞いておりました、楽しみにしております。どうぞよろしくお願いたします。

【企画広報部長】　　続きまして、本専門家会議の伊藤会長から御挨拶をいただきたいと思えます。

【伊藤会長】　　はい。川勝知事、どうも懇切丁寧な御言葉をいただいて恐縮しております。皆さんのお知恵をいただきながら、3回目までまいりました。

それで、思い起こしますと、川勝知事が言った文化というのは、色々な解釈ができて、その解釈に従って、どういうものをつくるかというイメージもまた変わるわけですがけれども、それは逆に、提言化しないで、文化という言葉自体、動きますから、それを、ここで皆さんの知恵をいただきながら、ある定型化した形にうまく落とし込めれば、これちょっと、日本でもあまりないものができるのではないかと、そういうように思っております。

それで、前回、私、記憶するのは、皆様の御意見の中で、荒木先生の方からコンソーシアムのお話がありました。コンソーシアムの話、これはワールドワイドで今、一番重要なことではないかと思っております。これは単に学生だけではなくて、ビジッティングスカラーの方々も、それなりの良い環境で仕事をすれば、それなりに色々な影響力を持つわけでございます。

それから、少し面白いことを言いますけれども、昔、日本で旧制高校があったときは、かなりの高等学校で1年生は全寮制でした。多分、第一高等学校も三高もそうだったと思うのですけれども。1年生は全寮制で部屋の中にたたき込むと。そういうことをやっておりました。静岡高校もそうだったかな。そういうことを私、前回の議論の中で思い起こしました。そういう全寮制と、海外からの若手の研究者とか、あるいはその、研究者が連れて

くる家族とか、そういう人々が一定の場所、例えば東静岡のようなところへ集まれば、それはそれとして、非常に面白いイメージをつくれるんじゃないかなと。前回の皆さんの御議論のまとめは、何かそういうところにあった気がします。

それについて、実は事務局の方も相当苦労されているようですが、一番最後のところで、皆さんと、ああ、そうかと思ったのは、この大体2.4ヘクタールぐらい、容積500%だったら、10万平米になるではないかと。そんなことあり得るかということで、大きさの確認をしました。私は、容積というのはたまたまそうなっていますが、実は文化というのは容積とは全く相入れない、そういう性格ですから、容積に関係なく、まさにこの2.4ヘクタールが、ああ、これが文化というものを表現する1つの空間だなとか、あるいは、1つのグリーンスペースだなというようになれば、それはそれで十分じゃないかと思っていますのですね。

そんなことで、多分、前回の結論、最後の結びのときも、容積については、500%なんていうことを考えなくても、別なことを考えた方がいいんじゃないかということをお願いしました。

それからもう1つは、やはり富士山を抜きにしては語れないだろうという御議論がございました。私もあまりぴんと来なかったのですが、ここの中、ちょっと斜めに富士山が見えるわけです。そうすると、うまいストリート、何とか通りをつくって、それで富士山のところに行って、そこは石原さんのところのマーケットか、あるいは私、林学で出ているから、木のほうのマーケットになるか分かりませんが、そういうところで、周りを街路樹が囲んでいて、アーチみたいになって、その中に富士山が見えれば、富士山が額縁のようにして見えるわけですね。通りを歩きながら。そういう通りがこの敷地のところに斜めにできて、その周りに低層で、国際化した学生や研究者の施設がドミトリーのように、並んでいると。何かそういうイメージも1つできるんじゃないかなとか。そんなことが、3番目に、私の頭をよぎりました。

改めて、今日3回目、知事もおられますので、もう一度、文化とは何か。その、静岡の文化とは何か。それを実際、空間に落とすとどういうことになるか。そういうことについて、これから御議論いただければと思います。

それで、事務局、あと2回あるんですよ。ですから、今日もフリーで、是非自由に御発言ください。あまり拘束されないで、のびやかに御発言いただきたいと思います。

以上でございます。それでは、事務局から、資料についての説明をお願いいたします。

【企画広報部長】 はい。ありがとうございました。

それでは、本日御出席いただいております皆様でございますけれども、お手元に配付しております委員名簿、座席表のとおりでございます。本日は、酒井委員が所用により御欠席ということでございますので、御報告をいたします。

また、県側の出席者でございますけれども、座席表のとおりでございます。

それでは、お手元の次第に基づきまして、議事に入らせていただきます。ここからの議事進行は伊藤会長にお願いをいたします。よろしくお願いいたします。

【伊藤会長】 それでは、議事では、「文化力の拠点」への導入機能・規模のイメージ、それについて、まず事務局から説明ということでお願いします。

【企画広報部長】 はい。それでは、ここからは着座にて失礼をいたします。議事次第にのっとりまして、まず事務局からの説明ということで、第2回専門家会議における意見への対応についてということでございまして、資料の1をお開きください。縦長2枚のものでございます。

昨年の12月25日に開催をいたしました第2回の専門家会議で、委員の皆様からいただいた御意見の対応について、御説明いたします。

委員の皆様からいただきました20項目にわたる御意見を、施設計画・デザイン、管理等のあり方に関する意見、それから、賑わいの創出・観光に関する意見、大学コンソーシアム、留学生等の交流支援に関する意見、そして、「文化力の拠点」への導入機能に関する意見と、4つのカテゴリ別に取りまとめました。

はじめに、施設計画・デザイン、管理等のあり方に関する御意見でございますけれども、意見の1及び2に記載のとおり、施設整備に当たっては、静岡の豊かな自然をコンセプトとすべき、あるいは、キーワードを1つに集中すべきとの御意見を踏まえまして、世界遺産富士山をはじめとする世界水準の魅力や、本県が誇る食・茶・花の文化等をコンセプトにした施設づくりに取り組んでまいります。また、意見の3に記載の、メンテナンスに手がかからない施設が必要との御意見を踏まえまして、コスト面や効率的な維持管理面も含めた整備・運営のあり方につきまして、次回会議におきまして御審議をいただきたいと考えております。

次に、賑わいの創出・観光に関する御意見で、意見の4の、広く県民参加型の庭づくりを考える必要があるとの御意見を踏まえまして、県民参加による「花の都」づくりを進められるよう、検討をしております。また、意見の5、建築と庭園が融合した世界水準の

美しい空間が必要との御意見につきましては、本日、石原委員から御提案をいただく緑化の考え方などを十分に踏まえた空間づくりを検討してまいります。意見6、7に記載の、県全体の観光のゲートウェイ的な機能を検討すべき等の御意見を踏まえまして、本県の世界水準の魅力等の発信に加えまして、交流客等を現地に導くコンシェルジュ機能の導入を検討してまいります。また、意見8、ホテルについて、市場動向等を踏まえた議論が必要との御意見につきましては、後ほど、市場動向調査の結果を御報告いたしまして、御審議をいただきたいと考えております。

次に、大学コンソーシアム、留学生等の交流支援に関する意見ということでございますけれども、意見の9から11に記載のとおり、e-learningシステムの活用方法を若者に考えさせることが重要。あるいは、外国人や留学生等を対象にした個性的な拠点づくりが必要などの御意見をいただきました。本日の会議では、大学コンソーシアムの拠点機能等につきまして、荒木委員から御提案をいただき、御審議をいただくこととしておりますので、よろしく願いいたします。

続きまして、1枚おめくりいただきまして、「文化力の拠点」への導入機能に関する御意見でございます。12番、13番に記載の、さまざまな導入機能が連続しているような空間づくりが必要。あるいは、多文化・多世代の交流の場が必要との御意見につきましては、施設や機能の配置に留意をしたレイアウトイメージを検討いたしました。後ほど、資料を御報告いたしますので、御審議をいただきたいと考えております。14番に記載の、古代東海道をどのように取り込んで見せていくかが重要との御意見につきましては、その歴史的価値などの発信と、充実したソフトの導入に努めてまいります。15番、16番に記載の、人の賑わいにつながる特徴的な機能が必要、あるいは県内外の人が見たいと感じる尖った機能の観点からの検討が必要との御意見を踏まえまして、世界水準の魅力の発信や、食・茶・花の恵みを満喫できる機能など、本県ならではの特徴的な機能の導入に努めてまいります。17番の、周辺の県立美術館等との関わりを検討すべきとの御意見につきましては、グランシップや県立美術館、ふじのくに地球環境史ミュージアムなど、学術・文化施設等との連携を強化し、本県の高い文化力を発信してまいります。最後に、18番から20番に記載の、メインユーザーを想定した上での議論が必要、あるいは導入機能をつなぎ合わせ、特徴づける検討が必要などの御意見をいただきました。後ほど、施設のメインユーザーと導入機能の組み合わせ等を整理いたしました資料を御説明申し上げ、御審議をいただきたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

資料1の説明につきましては、以上でございます。

【伊藤会長】 ありがとうございます。

それでは、「文化力の拠点」への導入機能・規模イメージ案、これを事務局から御説明してください。お願いします。

【企画広報部長】 続きまして、資料の2を御覧ください。

これは、前回の会議での御意見を踏まえまして、施設のメインユーザーと導入機能のイメージの関連を整理した資料でございます。

「文化力の拠点」のメインユーザーでございますけれども、左側の赤枠に記載をしております大学コンソーシアムや、国際学生寮の機能を利用する学生や留学生などの多文化の若者。また、右側の青枠に記載をしております人々を呼び込むテーマ性を持った宿泊施設等の機能を利用する国内外からの交流客。さらに、下段の黄色の枠で記載をしておりますグランシップ等で世界レベルの音楽等を楽しむ県民・地域住民の3者を想定しております。さらに、3者に共通する本県の世界水準の魅力の情報発信、及び、本県の歴史・文化を学ぶ・知る機能を、中核に据えまして、学生や留学生などの多文化の若者や、国内外からの交流客等が、本県が誇る世界水準の魅力や歴史・文化に触れ、日本一の食・茶・花の恵みが満喫できるような、静岡ならではの特徴的な機能を導入してまいりたいと考えております。

前回の会議での御意見を踏まえまして、上段に記載のとおり、ここで様々な情報を得たり見たりした人々を、県内の各地へ誘うコンシェルジュ機能を導入してまいります。また、各機能をつなぎ合わせ、特徴づけることが必要との御意見を踏まえまして、導入機能の相互連携や、メインユーザーの交流により新たに創出される効果を、クリーム色の枠の中にお示ししてございます。

資料2につきましては、以上でございます。

続きまして、資料の3を御覧ください。

「文化力の拠点」への導入機能、規模イメージ案でございます。この資料は、ただ今御説明いたしましたメインユーザーと導入機能とのイメージの関連を踏まえ、具体的な導入機能・規模等を取りまとめた資料でございます。前回の会議でお示しいたしましたものをベースとして、会議でいただいた御意見を踏まえ、各機能のメインユーザーを明示したほか、新たな導入機能の追加や、民間が導入する機能を含めた規模感を追記するなどの修正を加えております。私からは、前回の資料に修正を加えた点を中心に、御説明を申し上げます。

ます。

まずはじめに、1つ目のコンセプト、「創造・発信」のうち、上段の、個性ある文化を創造し、発信することで、本県の文化力の高さをより一層磨き高め、国内外に向けて、文化力の高さを発信する拠点機能についてであります。メインユーザーであります国内外からの交流客に対し、“ふじのくに”の文化力を発信する多目的情報発信スペースに加え、新たに世界水準の魅力の地に導くコンシェルジュ機能を位置づけました。世界水準の魅力を求める交流客のゲートウェイとすべく、富士山をはじめとする観光地や、「食・茶・花の都」の拠点施設等に、国内外の人々を誘う案内機能をイメージしております。

次に、日本一を誇る恵みの豊かさ、世界水準の文化や自然の美しさを実感できる機能のうち、「食・茶・花の都」の創造・発信機能についてであります。メインユーザーであります国内外からの交流客、及び、学生をはじめとした若者、留学生に対して、国際的に認知されるようなテーマ性を持った「食の都」や「茶の都」の魅力を満喫できる民間提案として、日本一多彩な本県の食材を生かしたレストランやB級グルメ、緑茶カフェなどの機能を求めてまいります。「花の都」につきましては、県民参加により、花と緑にあふれた美しい地域づくりを進めてまいります。

続きまして、2つ目のコンセプト、「学ぶ・人づくり」のうち、上段の、次代の静岡を担う学生をはじめとした若者が集い、郷土愛を持って、地域に根差した活動や、静岡ならではの学びができる機能につきましては、学生をはじめとする若者及び留学生をメインユーザーとする大学コンソーシアムの拠点機能形成の観点から、後ほど、荒木委員から、活用案の御提案をいただきますので、よろしくお願ひ申し上げます。

続きまして、世代を超えて集い、生涯を通じて学び、楽しみ、自らを高めることができる機能についてであります。このうちの図書室機能につきましては、メインユーザーである大学コンソーシアムの学生や研究者、子供やその保護者などが、本県の歴史や文化を学び、親しむことができるスペースや、歴史文化情報センターなどをイメージしております。

次に、下段の、歴史の観点から静岡を学べる機能についてであります。歴史資産を展示する機能につきましては、国内外からの交流客、及び県民をメインユーザーに、古代東海道の遺構の歴史的価値を体感しながら学べる展示スペースなどをイメージしております。

2枚目をお開きください。3つ目のコンセプト、「出会い・交わる」のうち、上段の、東静岡から日本平、三保松原に広がる地域の玄関口にふさわしい交流の核となる機能についてであります。海外からの賓客等をはじめとする、国内外からの交流客をメインユーザー

とする迎賓機能に加え、国際的に認知されるようなテーマ性を持った宿泊施設やレストランなどの民間提案を求めてまいります。

次に、中段の、留学生支援により、海外との多彩な出会い・交流を生み出すとともに、産業面からも海外とのつながりを深める機能についてであります。留学生や県外出身の大学生等の若者をメインユーザーとする留学生や県外学生の支援機能につきましては、後ほど荒木委員から御提案をいただきますので、よろしくお願いたします。海外ビジネスパーソンの招致や、国際交流を促進する機能につきましては、外資系企業をメインユーザーとするレンタルオフィスや、海外ビジネスインターン向け宿泊施設をイメージしております。

このほか、下段に、その他として、その他、民間による提案を期待する施設・設備として、前回の会議で御提案申し上げましたとおり、本県ならではの文化・学びに根差した民間の業務・研究オフィス、県内のクリエイターやデザイナーの活動の場となるアトリエやスタジオ、県民の生涯学習や若者の出会い等に資する多目的ホールなどをイメージしております。また、共用機能として、施設全体面積の40%程度を、さらに駐車場機能につきましては、既存のグランシップの駐車台数を確保しつつ、「文化力の拠点」の導入機能、規模に応じた駐車台数を確保することとして、立体駐車場として1万4,000平方メートル、大型バス等を含む平面駐車場を6,000平方メートルを想定しております。

建物全体の規模感としましては、表の下の黒枠で記載をしておりますけれども、全体、合計で3万3,000平方メートル程度、立体駐車場部分を除きますと1万8,950平方メートル程度、民間の導入機能を除いた公共機能分としては1万2,280平方メートル程度を想定してございます。

続きまして、資料が飛んで恐縮でございますけれども、お手元の参考資料1というものを御覧ください。資料が7までありまして、その次、参考資料1というものがついていると思います。よろしいでしょうか。

宿泊機能等に関わる市場動向調査結果の概要という資料でございます。前回の会議におきます御意見を踏まえまして、民間による導入を期待しております機能のうちの宿泊施設にかかわる市場動向調査を実施いたしましたので、その結果の概要を御報告いたします。

はじめに(1)静岡県内の宿泊者の状況であります。左上段グラフのとおり、県内の宿泊旅行者数は、2009年を境に大幅に増加し、その後は微増で推移をしております。宿泊施設のタイプ別では、左側の中段のグラフのとおり、ビジネスホテルの宿泊者の増加

が顕著で、直近の2015年では、2008年の2.8倍に増加しております。次に(2)静岡市内の宿泊者の状況につきましては、左下段のグラフのとおり、2013年以降、増加に転じております。次に(3)の静岡市内のホテル客室数の推移につきましては、右側上段のグラフのとおり、2003年以降、横ばい、または微増の状況であります。また、(4)静岡市内の宿泊施設の客室稼働率でございますが、右中段のグラフのとおり、客室稼働率は上昇傾向にあり、直近の2015年は70%を超える水準で推移しております。(5)婚礼需要の状況につきましては、右下、下段のグラフのとおり、県内の婚姻件数は減少傾向にあり、2015年にはピーク時の6割まで減少しております。ホテルにおける婚礼需要というのは低下しているものと推測されます。

続きまして、次のページをお開きください。静岡市内の宿泊施設への聞き取り調査の結果を御説明いたします。対象6施設について、客室稼働の状況から、東静岡のポテンシャルまでお聞きしてまいりました。まず、客室稼働率につきましては、概ね80%から90%程度の高い稼働率にありまして、特にイベント時は満室でホテルが不足しているということでありました。次に宿泊客の目的につきましては、多くのホテルはビジネス客が中心でありまして、インバウンド増加の影響につきましては、外国人宿泊者が増加傾向にあるということでもございました。また、バンケット需要につきましては、結婚式、一般宴会ともに厳しいと。料理・飲食需要については、地元の方々の利用が中心であるというような話を伺っております。さらに、東静岡のポテンシャルということでもございますけれども、現状では一定の宿泊需要はあり、宿泊特化型であるならば可能性があるという御意見がありましたとともに、東静岡の魅力を高め、日常的な賑わいを創出する必要があるとの御意見もいただいたところでもあります。今後、「文化力の拠点」施設における賑わいの創出によりまして、東静岡の宿泊需要の向上という好循環につながっていくよう、検討を進めてまいります。「文化力の拠点」の導入機能・規模イメージ案につきましては以上のとおりでございます。

【伊藤会長】 よろしゅうございますか。それでは「文化力の拠点」のレイアウトイメージ案について、事務局から説明をお願いします。

【企画広報部長】 それでは、続きまして、資料の4にお戻りいただければと思います。資料の4、「文化力の拠点」のレイアウトイメージ案(たたき台)というものでございます。ただ今、資料の3で御説明をいたしました導入機能・規模イメージ案、規模感等、これらを踏まえまして、メインユーザーや、さらにはメインユーザーとか利用者の動線とか、導

入機能間の連携等を考慮して、施設のレイアウト・ゾーニングイメージのたたき台をつくりました。

まず、資料の最下段の絵を御覧ください。1階・2階の平面のイメージでございます。一番下のところでございます。敷地がずっと横に長くありまして、その敷地のうちの下側のほうに、薄くグレーになっているところが建物でございます。まず、その上側の方の緑色で塗った部分は、古代東海道を生かした広場を配置するというで考えておりますものですから、建物は南側に配置するというイメージでございます。さらには、その建物の西側、図で言いますと左側ですけれども、この建物自体は、1階・2階は立体駐車場で、ワンフロア7,000平方メートル程度のものが2階建てということで、1万4,000平方メートルの駐車場を確保しておりますけれども、さらにグランシップや「文化力の拠点」の駐車場必要台数としては、平面駐車場として、この絵の左側、屋外に、さらに6,000平方メートル、これを確保するイメージであります。また、第1回会議におきまして、南側に暗い壁が並ばないように留意する必要があるとの御意見もいただきましたので、建物の南側、広い道路に面したところにつきましては、カフェとか食堂、物販施設を配置するとともに、街路沿いにオープンデッキを設けるなど、交流と賑わいを創出することをイメージしているところであります。

続きまして、その上の段、ちょうど資料の中段あたりのところが、3階のイメージでございます。この3階につきましては、ちょうど右側のところに東静岡駅と書いたものから赤い点線矢印が下に伸びておりますけれども、東静岡駅からペデストリアンデッキで接続される当施設のメインエントランスとしまして、まずは駅からこの3階のところの屋上庭園へ、人の流れを呼び込むことをイメージしております。さらにはこの3階の部分が、メインエントランスとなりますので、導入機能の中核であります本県の世界水準の魅力の情報発信を担うフロアとして、「食・茶・花の都」を体験できるレストランや、緑茶カフェ、さらには多くの情報を発信する多目的情報発信スペースの配置をイメージしております。さらにその上の4階部分につきましては、本県の歴史・文化を学ぶ・知る場として図書室を、さらにはその上、5階・6階の赤枠で囲んだ部分につきましては、大学コンソーシアムの拠点や、国際学生寮の配置をイメージしております。こうした施設配置とすることで、4階にあります図書室が、国内外の学生・県民・地域住民など、さまざまなユーザーで賑わい、多世代や多文化の交流を生み出す場となることを期待しております。さらに、7階以上、少しブルーで囲んだ部分につきましては、業務オフィスや、ビジネスインターン向

けの宿泊施設、外資系企業向けのレンタルオフィス、民間活力の導入による宿泊施設等を配置することといたしまして、最上階には、国内外からの賓客等を迎え、富士山をはじめとする360度のパノラマを楽しんでいただきながら、会談・会食ができる特別応接室とか、特別会議室、これを配置することをイメージしております。

なお、このレイアウトイメージ案では、先ほどの資料3でお示した施設の全体の規模感、約3万3,000平方メートルですが、それを中に入れ込んだというようなことから、建物の3階以上のワンフロアの面積を、概ね2,000平方メートルとして、グランシップと同じ高さの12階程度というようなことでイメージして、たたき台としてお示しております。

本日、「文化力の拠点」に導入する機能・規模等について御議論をいただくわけですが、ぜひ、このレイアウト・ゾーニング案をたたき台として御議論を進めていただければと思います。本日の御議論を踏まえまして、導入すべき機能や規模、施設配置等の精査を進めてまいりますので、よろしく願いいたします。

私からの説明は以上でございます。

【伊藤会長】 はい。どうも御苦労様でした。ありがとうございます。

それでは、次に、大学コンソーシアムの拠点機能形成ということで、荒木委員から御提案をお願いしたいと思います。

【荒木委員】 荒木でございます。先ほどの説明にありましたように、12月の会議では、ふじのくにの地域・大学コンソーシアムの概要と、それから、大学が三島から浜松までずっと分布しているというか、点在していると言った方がいいかもしれませんけれども、そういう状況についてお話し申し上げ、さらに、大学コンソーシアムとして、どういう活動拠点が必要かということと機能の内容についてお話し申し上げました。

今回は、もう少し、中身に入って、具体的に必要とする面積とか、先ほども説明がありましたけれども、規模はどういう根拠かということも含めた御説明を申し上げたいと思っております。この件については、大学課とコンソーシアムの方々とももちろん相談してまいりましたけれども、これが決定では、もちろんありません。あくまでも、本委員会の委員として発言させていただくということでございます。

まず、必要とする施設とその規模の考え方でございますけれども、資料を見ていただきますが、コンソーシアムの拠点機能として最低限必要と考えられる内容と、機能内容です。それを実現するための規模、面積ですけれども、それを求めて提案しているということが

内容でございます。

この資料5のところ、最初に機能が書いてありますので、その機能については4点に集約させていただきました。1つは、ICTを活用した教育研究機能と書いてありますけれども、これは、ずっと私が説明してまいりましたように、静岡県の状況として、三島から浜松まで、長い距離に大学が点在しているということの事情で、学生が東静岡に通ってこられないという状況も勘案して、SNSあるいはICTを活用する。ICT、さらにはSNSを活用した授業、この手法にアクティブラーニングを取り入れたらどうかという提案を申し上げてまいりました。この件の、そのために必要な面積を計上してございます。

それから、2番目の、地域連携機能、企業等相談室と書いてございますけれども、地域課題を、例えばそこに住む住民、さらにはその行政、あるいは企業の方々とともに、大学が考えていくということを標榜していますので、それについての問題点の解決、つまり連携して解決していくという機能が必要です。それが2番目の機能です。

3番目の機能は、学生、静岡県の点在している大学の学生、さらには研究者が交流するという機能でございますけれども、そこは交流スペースであるとか、学生の共同作業室であるとか、そういう場所が必要だということで、挙げてございます。

もちろん、この3点の機能に対して、事務室とか会議室とかという、事務的な機能が必要ですので、それを4番目に挙げてございます。それでは、4つの機能に対して、どのくらいの規模が必要かということ、色々な例を参考に試算させていただきました。これは、およそですけれども、連携機能のところ、企業相談スペースとか、こう書いてありますが、そのところで、少し2つに分けて申し上げたいと思います。1つは、コンソーシアムの占有施設として、全体として1,000平方メートルを考えております。そのうちの6割強、660平方メートルを、先ほどの教育研究、あるいは学生等の交流、そのほか、事務室とか会議室というようなことで、スペースをとったらどうかということで、合わせて660平方メートルでございます。もう1つ、その残り1,000平方メートルに対する340平方メートルについては、これは大学が必要とする講義室とか演習室でございますけれども、この件については、先ほど御説明がありましたように、必ずしも大学コンソーシアムだけが使うのではなくて、他の団体等と一緒に使っていく。例えば、そこで、地域連携を行うのであるとすれば、その機関が使うということを含めて、共有しながら、あるいはそこで予約をしながら使っていくという形をとったほうが、効率よく、あるいはそこでの賑わいが創出されるのではないかと考えております。ここは、別枠として、教育研究

のための講義とか、演習については、四六時中使うということではないという意味で、地域連携の相談室等も合わせて340平方メートルを考えました。

この件については、静岡市が産学交流センターというのを、この県庁の近くに設けております。いわゆるBestと称します。その内容が2ページ後に書いてあります。これは詳しく説明はしませんが、1つの例として、示しました。面積はトータルが993平方メートルでございます。合わせてこのぐらいあれば、ここにおける機能が発揮できるのではないかと、このように考えている次第でございます。

それから、2ページ目に戻っていただいて、国際学生寮、インターナショナルドミトリイと書いてございますけれども、この点に関しましては、私あまり、意見を述べてきませんでしたけれども、やはり皆さんと考え方を共有したいと思って、改めて提案させていただきまます。各大学が引き受ける留学生は、各大学が責任を持って、宿舎等はお世話をするというのが、本来でございますけれども、これからさらに留学生を増やすということ、さらには、現在、留学生がどういう状況に置かれているかということ、やはりアパートとかそういうところで居住するということが、かなり困難な状況になります。こういうインターナショナルドミトリイを増やすということは、これからの発展のためには大いに必要だと考えております。

さらに、ここに滞在する期間については最高1年ぐらい滞在するということがよろしいのではないかと、私、個人的に思っております。そのときに、留学生だけではなくて、日本人も一緒に宿泊する、いわゆる混住がよろしかろうと。そのときには、日本人が多い方がいいのか、少ない方がいいのかということで、状況で判断していきまますけれども、ある程度、見込みとしては、日本人が多い方がいいかなというので、2対1というのが、今、提案でございます。これは、割合的にはいかようにもしていけるかと思ひます。さらに、できるだけ独立した部屋というよりは、大きな1部屋の中で区切る、内部を区切るという考え方で、3人ぐらいが1つの部屋をシェアするという形をとったらどうかというのが内容でございます。もちろん、プライバシーを保つべきトイレなどについては、1人1人の必要面積を確保し、利便性と快適性を追求すべきだと思ひしております。食堂とかお風呂とかは、できるだけ日本のこれまでの文化を彷彿とさせるような状況で、共同がよろしいのではないかと、こんなように考えておりますし、さらに日常的に必要なランドリールームとかというのをそこに完備するというのは当然でございます。

日本人が多いという案については、いかようにでもなると申し上げましたが、そののと

ところで、具体的にどうやって交流を促進するかということについては、できるだけ自発性を重んじながら、それで時折、大学コンソーシアムのメンバーの方々がイベント等を軸にして、交流を図るということも必要ではないかと思っています。

また、大学コンソーシアムの提案する、例えば地域学を学ぶという機会を増やしたいと望んでいます。それぞれの地区にある小さな大学では、留学生が非常に少のうございます。私の大学もそうです。そのときに、充実した教育内容にすることは、ほとんどできません。特に地域学とか、そういうことの、文化的な要素を学ばせるというところが、少しうら寂しい感じがいたします。そういうところを、ここである一定期間滞在することによって、日本の古来、あるいは静岡県遺産を満喫し、理解していただくという形をとったらどうかというのが、これ全体のコンセプトでございます。

そこについての全体の面積は、いかようにでもなると思いますが、少し多目にとってございまして、約3,000平方メートル弱を考えてございます。もちろん、共有スペースをたくさんとりますので、ここに何人滞在するかということについては、設計次第だということになろうかと思えます。この件については、静岡大学が今、建築している雄蕨寮とか、さらには、立命館の、この前少し御意見が出ましたAPUの中身を、少し参考にさせていただいている次第でございます。

以上でございます。

【伊藤会長】 はい。先生、どうもありがとうございました。

それでは、次、石原委員の方から、外部緑化、空間緑化ですね。済みません。お願いします。

【石原委員】 石原です。よろしく願いいたします。

私はあくまでも庭園デザイナーでありまして、こういった緑があればいいのではないかなということで、先輩方もいらっしゃるのですけれども、勝手にという言い方は悪いのですけれども、私がこんなことがあったらいいなということで、絵を描かせていただきました。資料6の方をよろしく願います。

一番は私、新幹線から見たときに、ここを通ったときに、ここで降りたいというような緑のインパクトが何かあればいいなというのを、1つ思いました。そして、世界最先端の都市緑化であるということ。これは、緑だけではなくて、仕組みもそうであると。これは、メンテナンスのコストに関しましても、センサーを使ったり、屋上の緑はなるべく伸びないような仕組みにしていますとか、例えば、一部入場料をとって、それをメンテナンスコ

ストに充てるですとか、そういった、見た目だけではなくて、システムそのものが世界最先端で、緑をいかに、この中でメンテナンスコストも出していくということを検討できるような緑になればいいなというように思いました。

そして、屋上に庭園を設けまして、この緑をとおして、私は富士山の眺望が見えればいいなど。これは、あくまでもグランシップより若干低めのデザインにしたほうがいいのではないかなということで、少し考えさせていただきました。

次のページをお願いいたします。私自身は、季節を、春・夏・秋・冬ではなくて、365日、そして朝・昼・晩、1年間で千の季節があると考えています。この千の季節を、私はここで、駅を降りた方々に感じていただいて、古代東海道を、四季を通して、毎回、行ったときに、何か違う変化が感じられるような古代東海道を表現できたらいいなと思いました。それと、1つは、目だけではなくて、水の音ですとか、花の香りですとか、車椅子のことも考慮しないといけないですけれども、少し凹凸をつけたような、少しでこぼこしたようなイメージもあっていいのではないかなということ、少し考えてみました。

次のページ、お願いいたします。先ほどお話ありましたけれども、やはり富士山を借景としたフォトポイント、幾つもできればいいなというように思いました。ですから、富士山を意識した庭園のデザイン、また借景を利用しました、そういったデザインに、緑や松とか滝、もみじなどを、季節、季節で、ここのポイントからこの富士山を借景にして、撮影するといいいのではないかなというポイントをたくさん、この庭園の中に入れることができれば、きっとたくさんの方が来ていただけるのではないかなと。最近では、色々な地方都市、足立美術館もそうですけれども、やはり美しい庭にはたくさんの方が集まります。そういったことで、この静岡県でも、花や緑の生産でも、すごく有数でありますので、そういった使い方なども、この庭園を通して学べるということ、ここで検討していただければと思います。

次のページ、お願いいたします。静岡は徳川家康公のゆかりの地でもあります。東静岡には、江戸城とつながるような松の木をシンボルにしまして、ウッドデッキに松が生えているという、要は通りに対して、通常はケヤキとかを街路樹では使うのですけれども、あえて松などを使い、建物の周りには、現代のお堀をイメージしまして、これは、済みません。予算も何も考えておりませんで、こういった、建物の中にお堀があつて、例えば、この1つの棟が全部駐車場だったら、車が全く見えないんじゃないかなとか。これ、建物が広過ぎるんじゃないかなとなったときは、例えば、1つは温室があつてもいいんじゃない

かなと。温室の中に、例えば、いろいろな学校施設があってもいいんじゃないかなとか、少し色々なことを、絵を描きながら、夢を引き伸ばして描かさせていただきました。

次、お願いいたします。堀に見立てた水路の中に、シンボルとなるモニュメント、擬岩を配置と書いておりますけれども、私はこの1本の木、ディズニーランドですとか、ああいうようなところ、最近、私どもメンバーでやらせていただいているのですが、コンクリートで、木の形をつくることができます。そこに桜、松、もみじなど、1本の木が、四季を楽しめるような、こういったアイキャッチになるようなモニュメントが、この施設のどこかに何か所かあると、すごく皆さんがここで写真を撮っていただいたり、桜の季節ですとかもみじの季節には、すごく来ていただけるのではないかなというのも、少し思いました。そして、これは、夜のライトアップは、相当きれいじゃないかなと。最近、イルミネーションとかプロジェクションマッピングとかありますけれども、私は、花に光を当てた美しさは、もうこれに勝る美しい景色が表現できるのではないかなと思ひまして、夜もライトアップ、水の中からも光があつたり、鯉が泳いでいたら最高じゃないかなというのは、少し思いました。

次のページ、6ページをお願いいたします。屋上庭園からは、やはり富士山の眺望が見えるということで、ここの眺望から美しい景色、そしてまた、この3つの屋上の庭園がつながって、例えば、屋上を回遊するような道がつながり、屋上の部分でお金を稼ぐと。そして、シャワー効果として、上から下にお客様が下っていただきまして、そこで飲食であったり、いろいろなものに、来ていただけるのではないかなと。やはり私、グランシップにちょこちょこお邪魔するのですけれども、ここにやはり、ものすごい、全世界の人が見たいという、何かこういった庭園があると、少し集客のポイント、観光のポイントにでもなるのかなというふうに、少し思いました。

7ページ目、お願いいたします。私は、新幹線から見る人々、周囲の人々に向けての、文化力の発信拠点であるということ、これは、緑も私は文化だと思っております。今後、やはり人口が減っていく中で、いかに美しい緑、これはもう文化そのものではないかなと。江戸時代は、最も庭師が多い国が日本だったと。こういったことで、静岡に来たら花や緑のことが学べる。また、この庭園を通して、メンテナンスを通して、こちらで勉強しながら、ここで学ぶことができるみたいなこともあるといいのかなと。そこで、世界に誇る緑の文化、緑のパワーをここで表現できたらいいなと思ひました。

8ページ目、お願いいたします。静岡県がガーデンシティであるためには、人々が暮

らす場所のすぐ近くに花や緑があることが、私は大事だと思います。日本の7割は山です。ですから、どこにでも緑は、実はあります。私は、人が暮らすところの一番近いところに花や緑があることが、すごく大切ではないかなと。そのこと自体が、私は、何か豊かに暮らせるのではないかなということで、なるべく近いところにたくさんの緑を配置できたらいいなということで、こういったデザインを考えさせていただきました。

最後に、グランシップの芝生広場の周りにも、こちらの「文化力の拠点」の庭園ができたときに、同じような松を中心としました植栽イメージ、中にもみじがあったり、季節が楽しめるような緑化にすることで、このエリアを一体となって、緑でつなげることで、すごく一体となった緑の文化ということを表現できるのではないかなと思いました。

こちらで終わります。どうもありがとうございました。

【伊藤会長】 はい。御苦労様でした。どうもありがとうございます。

それでは、結び、最後、中間報告ですね。東静岡地区における「都市景観検討技術会議」というのがあるのですけれども、その報告です。お願いします。

【交通基盤部長】 交通基盤部長、野知でございます。よろしく願いいたします。

では、景観関係、2点ほど御報告をさせていただきます。

まず最初に、先週18日に開催いたしました「美しい静岡景観づくり推進大会」の御報告でございます。お手元に景観づくり推進大会のパンフレットを配付させていただいております。こちらのほうを御覧ください。大会では、知事と東京大学教授であられる武内和彦先生との対談をはじめといたしまして、県内の優れた景観づくりを紹介する事例発表などを行いました。大会の最後には、県・市町・関係団体など、一同がステージに登壇いたしました。このリーフレットの裏側でございますが、「美しい静岡景観づくり宣言」ということで、これは県立美術館の館長であられる芳賀徹先生に筆を入れていただいた前文と、それから5カ条からなります宣言でございますけれども、これを高らかに御唱和いただきました。この大会を契機といたしまして、美しいふじのくにづくりに向けて、地域総がかりの景観づくりの県民運動を推進してまいりたいというように考えております。

資料の7を御覧ください。次が、東静岡地区におけます都市景観の検討の状況についてでございます。東静岡地区におけます「都市景観検討技術会議」につきまして、本日御臨席をいただいております寒竹先生、内藤先生、また東先生にアドバイスをいただきまして、これまで4回ほど開催しております。この間、眺望の景観ポイントですとか、建築物、公共施設の実態、地域住民に対しますアンケート調査などを実施してきております。今回は、

この中間報告といたしまして、東静岡地区景観ガイドラインの案の骨子を御説明させていただきます。

1枚めくっていただいて、A3縦のカラー刷りのペーパーを御覧ください。まず、当該地区の景観形成の方向性を示しますテーマを定めております。「富士望み 緑の回廊 誘える 潤い賑わう 東静岡」。副タイトルとして、「文化とスポーツの殿堂」にふさわしく美しく風格のあるまちづくりというようにしております。このテーマを実現させるために、5本の目標を定めております。1つ目が①でございますが、富士山、日本平などの眺望景観の確保でございます。地上面や橋上などからおおぐ富士山等の眺望景観を大切にいたします。2つ目は、美しいまち並みの形成でございます。東西、南北の通りを景観軸として設定し、また、建物等の色彩デザインの統一を目指してまいります。また、景観軸に付随した拠点となります空間を景観コアといたしまして創出いたします。3つ目は、緑を感じる空間形成でございます。街路樹や花壇、建築物の壁面の緑化などによりまして、広い街路を並木道として整備を進めてまいります。4つ目は、賑わいと潤い。これを、まち空間のひだと呼んでおりますが、路地裏空間によりまして賑わいのひだ、あるいは子育て世代の奥さんたちが交流できるような、潤いのひだの創出であります。人々が一息つけるような場所ですとか、大通りから街区内の内側に入った、ちょっとしたオープンカフェなどが考えられます。5つ目は、拠点周辺地区の一体的空間形成でございます。「文化力の拠点」施設の整備、及び市有地のアート&スポーツ/広場整備に合わせまして、並木道の創出、あるいは富士山を借景とした、一体的で魅力ある空間形成などの事業設計工事に景観の配慮を求めてまいります。これらを推進していくために、住民や企業に対しまして社会貢献、あるいは地域貢献の意識づけ、あるいは支援制度、また個々の建築物のデザインを、計画の段階から景観上の配慮を求める事前協議制度などを検討してまいります。今年の7月ごろまでには、このガイドラインを取りまとめいたしまして、その後、地域住民に対してセミナーあるいはワークショップなどを通じて趣旨を御説明し、住民の声をとり入れるとともに、協同活動のきっかけとしまして、東静岡地区の良好な都市景観の形成に努めてまいりたいというように考えております。

報告は以上でございます。よろしく願いいたします。

【伊藤会長】 はい。ありがとうございます。以上で、皆さんの手元の資料、全部説明いただいたと思います。

それで、随分資料が多いのですが、まず事務局で資料2から4について、全体像につい

て御説明ございました。これらについて色々な御意見をいただいたらどうかと思いますけれども。御発言いただきましょうか。どうぞ、お気づきの点ございましたら、御発言ください。

少し私から、事務局に、質問です。資料3で、コンセプト、「創造・発信」、「学ぶ・人づくり」、「出会い・交わる」、その他とございます。これの中できちっと御説明いただいているのですけれども、こういうコンセプトを受けとめる場所は、2.4ヘクタールの土地の上ですね。その中で、これを全部入れると、全くこれ、何が何だか分からなくなる。多分、前回もこれ、同じような議論をしたと思うのですけれども。この中で、「文化力の拠点」というところで、コンセプトが3つあるのですが、どこに主力、重点を置いて、どこがそれを支えるコンセプトにするか、とかですね。何かそういう点での事務局としてのお考え、何かございませんか。これ、全部、盛り花のようになるのですか。まあ、盛り花もきれいなのですけれども。

【企画広報部長】 この3点のコンセプトを定めたというのは、26年度に多くの委員の皆様のお参加をいただきました「東静岡周辺地域の整備に関する有識者会議」という中で、御議論をいただいたコンセプトでございます。東静岡駅南口の、この「文化力の拠点」を整備をするところに、盛り込めるものをたくさん盛り込んでいくのか、それとも少し絞って、施設規模というものを考えながらというところで、その有識者会議の意見が固まった以降の変化といたしますと、日本平の山頂に、シンボル施設の整備が検討されております。そちらのコンセプトにおきましても、文化力の高さ、静岡の豊かさを発信するというようなことがうたわれておりますので、南口の部分で担う、その発信、それから文化力の発信的な部分というのは、若干薄まったというような感じがしております。やはり、東静岡駅のところは、この地域の玄関口ということで、賑わいということでありまして、先ほどのメインユーザーというような学生・留学生のところをメインに、あとは交流客への情報発信というところに絞り込んだつもりではあります。

【伊藤会長】 今、部長御説明のところ、東静岡駅は、この文化、静岡県の文化の玄関口であって、そこで、一番まず考えられるのは、人が行き交うということです。そういうことがここできちっと確保できるような機能として、どういうものがあるか。そういうことに関わってくると思うのですが。

率直に言って、私の感想なのですが、まだ人が見えていないのです。人が東静岡駅をおりて、ここへわっと来て、広場でおしゃべりしながら、オープンテラスか何かでお茶を飲

んだり、何かして、賑やかだなという、そういう文化的な活況というのですか。そういうものが果たしてうまくつくれるのかどうか。そのところがもうひとつ、なかなか理解できないのですが。委員から、それに関して御意見どうでしょうか。

内藤先生から伺えますか。

【内藤委員】 それは厳しいです。

【伊藤会長】 いや、いいですよ。出だしは何でもいいです。

【内藤委員】 まあ、伊藤先生が言われたように、ちゃんときれいにメニューはそろっているのですけれども、その、どこに重きを置くかというような話なのだろうと思うのです。私も、どうしたらいいのかなと思います。後で、施設の方で少し意見を言おうと思っていましたので。

1つ、今の思いつきなのですが、グランシップがありますね。グランシップはグランシップって分けていますけれども、それとこう、どうつながって、これを活かすかといった話が、本当はあったほうがいいのかないかなという気はします。

あと、大学コンソーシアムのお話を伺っていて、学会やるか、やらないかみたいな話がありますよね。だとすると、例えば、学会をやるときは、何か小部屋があったり、何かたくさん集まったりとか、そういうような場所が必要ですが、そのたくさん集まる場所は、じゃあグランシップで補完できるかどうかという、そういう、アカデミアが関わったときに、その話があった方がいいかなという雰囲気がありました。それをやると、何かもう少し広がりが出てくるような気がしました。以上です。

【伊藤会長】 どうもありがとうございました。どうぞ。

【荒木委員】 今回の、講義室とか、講演のための場所を確保ということについては、やはりグランシップと一緒にやるということが基本だと思います。特に、グランシップには、非常に大きな空間がございます。大人数が入る、卒業式や入学式が、外でなくそこでできるような大きな空間があるわけです。そこを最大限活用するということが基本です。我々のコンソーシアムだけが教室をたくさん準備するということについては、やはり否定的です。共通でみんな使うということが大事で、足りなかったらグランシップということも含めた考え方でやると。これが基本ではないかと思っています。ですから、おっしゃるとおりの形で、全部そろえるという案にはなっておりません。

【内藤委員】 連携しながら。

【荒木委員】 連携しながらやるということが基本だと思います。

【伊藤会長】 3回目なので、また少し勝手なことを言わせてもらいます。まだ、東静岡駅をおりて、ここへ来て、人がこう、そこで何か動いて、ある仕事をするというイメージが、私、頭の中に出てこないのです。学会というのも、朝はわーっと集まるけれども、みんな部屋へ入って議論して、昼はお弁当をいただいて。午後は面白くなるかという、どこかまた静岡の町の中へ行って、会食をしようとか、打ち合わせをしましょう。

ここで、人が、こうこう交わってくるというような、あるいは常住の、ここの賑わいを確保できる、何かそういう使命を持ったような人たちの、どんな活動ができるのかというのが、どうもまだ頭の中に入らないのですけれど。

どうぞ。寒竹先生。

【寒竹委員】 資料に沿って行くと、この、今お話聞いていると資料2に、隣にはスポーツの領域ができるわけですね。そして、グランシップで芸術の領域ができて。ここが文化の領域といった場合に、この、最初のイメージ図の中に、スポーツ、こちら、どこまで押さえられるかわからないですけれども、スポーツの領域があって、芸術の領域があって、ここに文化の領域があると。その全体があって、今、これだどこの「文化の拠点」だけで閉じた形で考察が行われていますけれども、内藤先生が言われたように、芸術のグランシップとの関係、及び今後、隣のスポーツの関係。スポーツというのはもともと、芸術の一部であったわけですから、その関係性がこの中に入ってくれば、委員長が言われているようなものが見えてくると。

もう1つは、今後、具体的に、文化力、文化力と言うけれども、文化というのはカルチャーだから、土着的なものであるわけです。そうすると、普遍的な文化ではなく、静岡の文化というのは何なのかなという、その文化というものを捉えて、話を進めていくと。そういう場合には、色々な文化でも、東京とかああいうところは、すごくキッチュとか、少しひねくれたというか、少し尖ったとか、そういう文化です。そうすると、静岡の文化というのは、スポーツがあって芸術があって、ゆとりといい気候といい食事と、心の健康といますか。やはり具体的な静岡の文化ということを入ることと、周りとの関係性の中で、ここがどうあればいいかというようなことを、この資料2の中に入れ込んでいただければ、色々なものが見えてくるのかなという気がいたします。

【伊藤会長】 ありがとうございます。確かに独立事象で、ここはここ、グランシップはグランシップ、スポーツはスポーツで考えると、あまり有効に使えないです。お互いが。

はい、どうぞ。部長。

【企画広報部長】 資料2の説明、若干補足します。確かに北側にできるスポーツの殿堂のところでの集客の意識はありませんが、資料2の一番下のところ、県民・地域住民という意味では、グランシップや舞台芸術センターなどで、そういうような音楽や芸術を楽しんだ方が、この、ちょうど玄関口のところの行き帰りに、緑の部分を使う。静岡の農芸品を活用した高水準のレストランであるとか、お茶、それから庭園を楽しむ。そういう利用者が、ここの整備をされたものを楽しむという発想、思想はあります。

それから、静岡の文化は何なのかと言われる点につきましては、この建物の中でのコンセプトは食・茶・花ということをメインに、まずは味わう、それから見てもらう。それをメインとしております。その出し方は、冒頭説明しましたように、民間の提案に相当委ねている部分があります。地場の食材を使ったレストラン、それからカフェ、物販、そういうようなものについては、民間提案に期待をしている部分と、それらを発信するソフトの充実をした多目的情報発信コーナー、そういうようなものについては、公共で整備をしていこうというように考えております。

いずれにしても、冒頭、会長から人が集まってくるイメージがないというのは、確かにおっしゃられるとおりで、例えばこの施設のイメージの中でも、相当、世界的な水準であるとか、さまざまなテーマ性を持ったような宿泊施設とか、何か人を集められるものが必要だなと考えておきまして、絵にはあわせませんけれども、例えば民間からの、そういう人を惹きつけるような、独創的な宿泊施設であったり、レストランであったり、さらにはこの屋上庭園から、古代東海道に向かって伸びる「花の都」としての美しさであったり、そういうようなものを、当面は、人を集めてくる機能として織り込んだところであります。

【伊藤会長】 先生、どうぞ。

【東委員】 先回の会議のときにお話しさせていただいたのですが、この地区の全世帯を対象に東静岡周辺景観まちづくりアンケート調査を、静岡市と協力して、私の研究室でさせていただきました。2,091世帯がいました。ですので、私は、そのアンケート調査結果から、住民の声を聞かせて頂きました。ここには若い世代の、30代、40代、50代ぐらいの方が大変多くお住まいで、高齢者ではなかったという結果をお話しさせていただきました。

【伊藤会長】 はい、そうです。

【東委員】 この資料2については、私の中では、施設の求められる機能が整理されて

いると思っています。また先回、やはり提案させていただいた、学生の交流の場を考えています。具体的に申し上げますと、三保松原で、2回目の三保プランコンテストが開催されています。これは全国の色々なところから学生が集まって、フィールドを通し意見交換しながらその地域振興のプランづくりを、2泊3日で行うという取り組みが行われています。そこには、東京大学からも慶應大学からも、全国から学生が集り、三保松原をいかに振興するかをテーマに取り組みが行われています。そのような点からは、すごく有意義なものになるのではないかと思います。こういった公共の形の、ソフト面を軸にすると、新しい取組になるのではないかしら。

そして、世界からの留学生を対象にすれば、ますます交流に厚みが増え、色々な価値観を持った、希望を持った学生たちが集まってくれば、そこには新しい文化が生まれるのではないかと思います。

しかしながら、先ほどの三保プランコンテストなどで発表を聞いていますと、やはり2泊3日というのは大変短い期間で、学習が足りないところが課題でした。そこで長く滞在できる場があれば、もっともっと色々アイデアが出てくるのではないかと思います。その拠点施設、場になれば良いと思います。学生たちは、遠隔地で、グループを組んでいますがスカイプで顔が見えて、意見交換するような会議を繰り返し、進めて、その場に集まり実践することができればと考えています。

【伊藤会長】　そうですね。みんな、SNSでそういうことをやっているようです。

【東委員】　そういった取組をしているということにより、大変魅力的な地域になってくるのかと思います。特に、ここに書かれている『食』では農産物の静岡の魅力が集められます。それと図書館ですとか、学習機能。そのアンケート調査結果からは、こういった機能が欲しいというようなことが多く書かれていたので、地域の人にとって大変魅力的な施設になるのではないかと思います。そして国際レベルだったら、ますますその文化度が上がっていくのではないかと期待しているところです。

以上です。

【伊藤会長】　国際的な話もありますが、もう少しドメスティックに、身近なところで考えると、地域の30代、40代の意識を持っている主婦層などに、ここにある場を提供する、積極的にそれを活用すると。そういうことも、ちゃんと頭に入れてくださいということです。

【東委員】　そういうことも視野に入れてもいいのではないかと思います。

【伊藤会長】　　そういうことです。

【東委員】　　最初は私も顔が見えずどんな方がお住まいになのだろう、他地域と同様に高齢者が多くを占めるのかしらとか思ったのですが、調査をしたら、子育て世代が全国から約16%の方が集まり、また、半数が静岡市内から移動し、東静岡に来ている結果もでております。

【伊藤会長】　　いい方が集まっている。情報発信できますね。

【東委員】　　交通の便が良いということなので。その方たちの魅力の場をまずはベースにしたら良いと思います。

【伊藤会長】　　それは、ものすごく大事だと思います。

【東委員】　　そういうようなことを取り組んでいき、すごく魅力あるものができ上がってくるのかなと思います。また、先ほど別の資料にもありましたけれども、先生がご提案されている、花を育てるとか、景観意識の高い方もすごく多く見られ、地域づくりに参加したいという方も多かったので、ぜひ、今、チャンスだと思います。そういう、拠点整備がされる過程、プロセスを大事にしながら、学生も一緒に取り組んで、つくりあげていく。つくり上げながら考えていくというのも1つあります。

【伊藤会長】　　今の、そうですね。東先生のおっしゃった、地元の、埋もれている、本来、すごい能力を持っている人たちがばらばらだけれども、それをこの場で、何かソフットの仕掛けでみんな集まってもらおうと。その目的として、石原さんが言っているような、緑についてのある方向性を専門家が示して、それに対して皆さんが貢献していけば、面白い運動になりますね。

【東委員】　　そうですね。それと、あともう1つよろしいですか。

【伊藤会長】　　はい、どうぞ。

【東委員】　　済みません。長くなってしまいますけれども。

今、静岡大学も県大も、地（知）の拠点大学ということで、COCが採択されていると思うのですが、私の大学でも採択されていて、いよいよ4年目になります。そして、大学推進プロジェクトでは、北海道から九州のキャンパスが連携して来年、観光イノベーションプロジェクトを展開します。北海道から九州までの大学間でのプロジェクトでは、宿泊機能等があると、全国から人が来やすいと思います。

【伊藤会長】　　海外留学の学生で、キーになる何人かを集めて、ドメスティックに、北海道から沖縄まで、とにかく色々なプロジェクトで静岡へ集まろうと。留学生に向けて発

信して。今回は、何かお祭りのプロジェクト、次は健康のプロジェクトだと。次はヘルスケアの、何か、そういう話題を全国へ発信し、それでみんな集まろうと。大学に関係なく集まろうと言って、東静岡に集まって、ちょっとしたセミナーをやって、そこで交流ができて解散するとか。そういうようなことができると、俄然面白くなります。その企画を誰がするかというと、やはり、これどこか提言で、県の若い人などが、その企画をつくるような下地を支えてやらないといけないかもしれませんけれども。

【東委員】 先ほどの、景観まちづくりでは、静岡市の景観担当の若い職員の方たちと、私の研究室で一緒にさせていただきました。それは学生にとっても学びでしたし、若者目線でまちを見直す双方にとって、いろいろな視野の広がり、一緒にまちをつくっていく意識が共有は出きたと思います。

【伊藤会長】 全国の大学の留学生に対して、インフォーマルだけれども、例えば石原先生が言っているように、松と富士山とか、そういうガーデニングについて、ここでどうも動き出すのだと。時間があったら集まってこいと。何も、その5月じゃなくてもいい。時間があったら、11月でも12月でも、その運動はずっと続いているんだと。そういうようなことができると、これ、とっても面白くなります。アメリカの大学では、そういうことを頻繁にやっているわけです。

相当これは、エネルギーは使うけれども、でも、やったら面白いです。

【東委員】 エネルギーは使いますね。でも、やらなければいけないと思っています。

【伊藤会長】 どうぞ。石原先生。

【石原委員】 私は、やはりその、緑のシリコンバレーみたいな、尖がったこと、緑に対して尖がったことが学べる。ここに来たら、世界の最先端の緑の色々なことが学べるとなると、すごく私は、何か行ってみたい、まず行ってみたいということ、それが、私、1つあるのかなというように思います。

もう1つは、先ほどおっしゃいました、30代、40代、50代の方々が、2,000名も住んでらっしゃると。

【東委員】 2019世帯だから、住民はもっと多くいらっしゃいます。

【石原委員】 世帯。そうなりますと、5,000ぐらい。5,6,000人ですね。そうしますと、日々の賑わいというのが、もうすごい、ガーデンカフェだとか飲食がすごくおいしければ、まず足元の賑わいは、例えば静岡県内からでも、東京からでも、あそこに行ってちょっとのんびりしようかなという、足元の賑わいはできるのかなというようには、

少し思いました。

【伊藤会長】　　そうですね。ありがとうございます。

それでは、続けて、どうぞ。

【藤田委員】　　本日、事務局の方からの説明の中で、メインユーザーがまず誰であるのかということを確認に御説明いただきました。それから、前回の資料の中では抜けていましたけれども、観光の拠点となるところを、今回はコンシェルジュという機能に落としてあるというところも見えてきて、まだまだ、機能として薄いですが、何となく骨格が見えてきたのかなというような感じがいたします。

この間の会議の中で、とにかく、他にあるものをつくっても仕様がないうことと、特に何か特徴的な尖ったものをここに持ってこなければ、意味がないのではというような話をさせていただいたのですが、いかに、メインユーザー以外の方たちでも、例えばここで時間を過ごせるですとか、あるいはここに来たいですとか、そういうようなものをつくっていかないといけないのかなというように思います。

というのは、こういった行政施設の中での、例えばレストラン経営に置きかえてみますと、手前ども、現在、県あるいは市の施設の中で、4軒ほどやらせていただいているのですが、私どもがやらせていただく前は、その業者さんたちがほとんど経営難で抜けてしまった後、我々がやらせてもらっているというようなことを考えても、遊びのない、固い、今までの施設ですと、非常に厳しいのかなというような感じがいたします。ですので、いかに、最初だけじゃなくて、10年、20年必要とされる、そのテーマが何であるのか。キーワードが何であるのかと。そういったものをはっきり、この施設の中に落とし込む必要があると。それが今日、石原先生から御提案いただいた緑化なのかもしれませんし、何かその辺もしっかりと明確にして、10年、20年続くキーワードというものを大切にしながら、この地域で育てていくというようなことも、もう少し深く掘っていききたいなというような感じがいたしました。

以上です。

【伊藤会長】　　どうぞ、続けて御発言いただければ。

【石塚委員】　　その前に質問なのですが。

【伊藤会長】　　はい、どうぞ。

【石塚委員】　　この施設をつくる整備の仕方、やり方は、どのようなやり方が教えていただきたいということと、あと、留学生の施設をつくるのは非常に良いことだと思う

のですけれども、この留学生というのは、東部とか西部の大学の、女学生も、この中でみんなお考えになっているのか。このあたり、まず教えていただきたい。

【伊藤会長】 留学生については、荒木先生から。

【荒木委員】 この件は伊東学長先生から御説明いただくとは思っていますけれども。

具体的に、浜松からここに来るといのは、学生の身分では、あまり簡単ではありません。ですから、一度集まったあとは、結びつきをさらに深めるという方策を、SNSあるいはインターネットを使うということについての話をしてきたわけです。ただ、留学生については、やはりある一定の期間、滞在した方がいいと。日本文化、あるいは静岡の文化を、こういう中央で学ぶということを含めたやり方があるのではないか。それも、日本人にも同じようなことが言えますけれども、ここにある期間滞在する。最大1年間。こんなような考え方を、先ほども説明申し上げたわけです。

【伊藤会長】 はい、どうぞ。

【石塚委員】 最初に来ていただいて、あとは。

【荒木委員】 そうですね。また、もとに戻るといこと。そこのところをどういうようにしてやるかという工夫が必要かと思っています。

【石塚委員】 整備の仕方は。

【企画広報部長】 整備手法につきましては、先ほど、施設全体の機能・規模感のところでお示ししたとおり、民間提案を求めるところというのが、約3万3,000平方メートルのうちの6,000平方メートルほど入っています。そこは、最小限入っているということで、先ほど言いましたような、国際的に認められるようなテーマ性のある、しかもそのビジネススペースに乗るようなホテルをつくる、レストランをつくるという、そういう提案がいただけるのであれば、その面積がどんどん増えても構いませんが、その部分については、あくまで民間の資本で運営をしていただくということが基本になります。そうしますと、3万3,000平方メートルのうちの6,000平方メートルを、民間の提案を求めようとしていますので、残りの2万7,000平方メートル、そのうちの1万4,000平方メートルは駐車場の部分でございますけれども、その施設については、基本的に県の方で用意しようと思っておりますけれども、県の方で用意するに当たっても、その整備手法については、PPPとかPFIとか、民間の活力を使っただきながら、何十年かで、その賃借料で返していくと。さまざまな手法が考えられるということで、それも含めまして、最終的にこの専門家会議の中で、第5回目までには固めていただく。そんなスケジュール

でおります。

【石塚委員】 グランシップは、コンベンション・アートセンターとなっています。ですから、当然、コンベンション機能は十分あります。それから、あとは芸術ですね。その両方を。

【伊藤会長】 オペラなんかできますか？

【石塚委員】 直ちにオペラというわけではなく、会場をつくったり、造作を整える必要があります、やろうと思えば、可能です。

【伊藤会長】 そうですか。

【石塚委員】 それで、少し現状をお話しします。例えば、全国のコンベンションを考えますと、静岡というのは、私は、非常に地の利がいいところで、多分、色々な施設がきちんと整っていれば、かなり誘致が可能だろうというように思うのです。一番のネックとなっているのは宿泊機能なんです。大きいコンベンションを持ってきたときに、宿泊が足りないと。ところが、それなりの宿泊機能をつくれば、今度、コンベンションがないときに施設が余ってしまうわけです。そこが非常に悩ましいところなのです。

【伊藤会長】 そうですね。

【石塚委員】 そういう意味では、現実的に見ますと、やはり民間資本にとって魅力のあるところにするためには、少し時間がかかるのではないかというように思います。だからいきなり色々な施設を全部つくってしまうと、多分、経営的な面でうまくいかないというケースが出てくることを心配をしています。

ですから、今度のこのコンソーシアムにしても、留学生の話にしても、それからデジタルセンターというのですか。ゲートウェイ的機能というのは、非常に良い機能だというように思います。

まちの賑わいという意味で言うと、今、グランシップに良いレストランがあるのですが、そのレストランもなかなか経営的には厳しいです。ですから、まちの人たちが、家族で食事に来るような魅力あるレストランにすれば、それは成り立ち得るのだと思うのです。その発想で考えると、今度の新しい施設の中に、色々なレストランだとか、そういうものがある場合に、広く集客できるような魅力あるものにしないと、経営的には、なかなか大変だろうという気がします。

グランシップも、例えばコンベンションだけじゃなくて、アートの点でも、さらにレベルアップして、皆さんがたくさん来ていただける、そういう活動をしていかないと、この

計画にはなかなか貢献できないだろうという感じもします。一気に整備するものもあるだろうし、それから、若干時間をかけるというような、そういうものもあるような気がします。

【伊藤会長】 はい。ありがとうございます。

伊東先生、ご感想を。

【伊東委員】 伊藤会長のほうから、何か、人が集まってくるイメージが湧かないというお話があったので。コンソーシアムとしてというか、静岡大学、私だったら何に使うかなということ、色々と考えていました。確かに1つ、学会というのはあり得る話で、グランシップと合わせて、結構、使い勝手の良いところになるけれども、でも、学会なんていうのは、年に何回もあるわけじゃありません。もっと日常的に、どういう使い方があるのだろうかということです。

静岡大学は、今度の4月から、地域創造学環というのをつくります。それを、どのように持っていこうかというのを、今、いろいろ議論しています。私は、そこで入ってくる学生は、もっともっと、街の中に出て行って、色々な人と交わって成長して行って欲しいのです。その中には、アート&マネジメントコースですとか、スポーツプロモーションコースだとか、そういうものもつくって、それから防災とか都市づくりのような、そういうコースもあります。それからその学環ではないですけども、うちには農学部があるので、花卉も含めた栽培というのを、一生懸命勉強している学生たちもいるわけです。そういう学生たちは、今、藤枝のフィールドに行っているわけです。それが東静岡で、ある程度、世界でも先端的なことが学べる場があるということは、栽培系のことを勉強しようとする学生にとって、魅力かなと。

それから、留学生に関して、静岡大学では、今回、アジアからの学生をたくさん集めようということで、寮をつくったのです。その寮をつくるのに当たって、これまで安東というところにあった国際交流会館というのを廃止して、土地を売り払って、それも原資にして新しい寮をつくったのです。その安東の国際交流会館を閉めるに当たって、周りの住民の方々から、やはり相当、惜しまれました。何を惜しんでいただいたかという、やはり、地域の方々との交流なのです。今回、私どもの留学生の寮は、小鹿に建ちます。95人分、プラスアルファぐらいの留学生の寮。そこに、さらに東静岡に留学生が入ってこられるような形になると、小鹿と東静岡というのは、すぐ目と鼻ですから、留学生が100人規模、100人以上の規模で、小鹿、東静岡というところに居住しているという

ことを、もっと活用するというか、そういうことを考えられないのかなとか、そんなことを思いながら聞いていました。

【伊藤会長】　そうですね。ありがとうございました。

【石原委員】　もう1つよろしいでしょうか。

【伊藤会長】　どうぞ。

【石原委員】　済みません。私、今、伊東先生のお話お聞きして思っただのは、世界でトップの、例えばイギリスですごく、土の研究の権威の方とか、シンガポールで例えば熱帯雨林の権威の方とかいますが、東静岡は、富士山の頂上から海の底までの、すごい高低差があって、すごいことが学べるエリアではないかなと。海と山のつながり。こういったことを、私は、建物にかけるのもそうなのでしょうけれども、もっと人にかけると。どういう人を捕まえてこられるか。捕まえてこられるかという言い方が、変なのですけれども、この人から学びたいというような人を、ここで、何か常駐じゃないですけれども、そういったようなことができれば、すごくやはり魅力があることが、静岡大学の一部門というような先生の見解をお聞きして、私も思っただのです。そうしたら、世界中から、富士山があって、海の底まで、現実で学べるので、面白いのではないかなと思いました。

【伊藤会長】　今の伊東先生のお話を広く言うと、私はこの留学生会館、1年間の入居を必須にして良いかと。それに100人ではなくて200人ぐらいにして良いと思うんです。静岡大学も入れるけれども、東海大も入るし、色々な人が入れる、要するに特定の大学ではなくて県ですから。そして、県の方で意図的に面白い学生を選べば良い。それから、地域住民、30代から40代の女性にホストファミリーとなっていただく。そうすると、きっと動きますよ、これ。

そうすると、何を言いたいかということ、内藤先生の指導がありますが、どんがらありきではなくて、まずアクティビティ、どういうものが本当に動くかということを考えて。もしかすると、そのホストは、日本食の美味しいものを教えるなんてことをやるかもしれません。そうすると、クッキングスクールのような、面白いものを集めたほうが良いかもしれないとか。連想ゲームですよ。そうすると、そのクッキングスクールに、静岡のほかの普通のお嬢さんも来るとか。だから、東静岡、何で呼べるかということ、クッキングスクールで美味しいものを、エキスパート、あそこへ行けばできるんだぞというので、売れて、そういうスクールはどういうところにあるかということ、内藤先生に設計してもらった、仮設風の2階建ての軽い建物の中で、そういうのをやっているとか。容積に足したって、3、

4,000平方メートルにしかないけれども、3,4,000平方メートルでアクティビティーがわーっと、薄く広がるより、小さいところでアクティビティーがわーっと高まっていくまでに、みんなそれに目をつけますよね。

それからもう1つ、私、グランシップで何をやっているかわからないのだけれども、音楽を、あらゆる種類の音楽を、あそこでやれますか？ポップアートから。全部やれますか。

【石塚委員】 対応できます。

【伊藤会長】 そのプログラムはちゃんとしてますか？

【石塚委員】 それは、これからです。

【伊藤会長】 そうですね？ 私、音楽と食べ物は、文化の底辺で、本能的に一番重要なものだと思っています。そういうものを、ユーザーズアートプロジェクトをもっと再活用する、もっと活性化するために、ミュージシャン、どういう人を集めたら良いかとかね。ジャズっぽいものから、何でも良いのですよ。

【石塚委員】 それは、ジャズも最近、我々、力入ってますし、古典芸能も一通り今やっています。

【伊藤会長】 そうですね。クラシックの古典芸能なんかも、これは底辺で重要ですね。

それから、歌舞伎・能なんかはどうなんですか。

【石塚委員】 歌舞伎も文楽も、能も一度はやっています。

【伊藤会長】 そういうものを、もっと外へ引きずり出す。あの建物から外へ引きずり出すような場所が、この「文化力の拠点」だというようにすれば、もうちょっと人の出入りが、賑やかになってくるかなと思うのですけれども。

どうぞ。

【荒木委員】 先ほど少し私が申し上げた、留学生が一定の期間だけここに滞在して色々な文化を学ぶ。ここに4年間住まわせるのではなくて、やはり1年間はこちらで。そして所属の大学と連携する。

【伊藤会長】 そうですね。

【荒木委員】 それは、静岡大学だけじゃなくて、ほかの大学もやれば良いですよ。そういう形で、ここに、長期間ではなくて、できるだけ短期間で。

【伊藤会長】 1年の時はここにいて、2年、3年はそれぞれの大学に戻るとかね。

【荒木委員】 こんなようなやり方をすれば、ここが活性化すると思います。その時に、色々な住民の力を借りるということが、来たばかりですので必要かと思います。

【伊藤会長】 僕も50年前、あるアメリカの大学に行ったとき、一番良かったのは、ホストファミリーを紹介してもらったことでした。これは、ものすごく効きました。それから、ホストファミリーを通してのアメリカの人のネットワークと、それから研究所の人のネットワークと両方持てましたからね。とってもよかったです。

知事もオックスフォードでそういう経験あるでしょう。

【川勝知事】 はい。

【伊藤会長】 今のあたり、知事から少しお話してください。

【川勝知事】 まずは、ここは大学町ではないのですね。オックスフォード、ケンブリッジ、あるいはハイデルベルグのような、大学が1つあって、その周りに町ができるというのではなくて、すぐ近くには東海大学の短大もありますし、静岡大学、県立大学もあります。それから、英和学院大学もあります。それから、1駅隣の草薙に、今度、常葉大学のほとんどの機能が、そこに、4ヘクタール、もっと大きいかな。そこに来るということで、たくさんの若者が来る、そういう場所になっているのです。ですから、学生街というようなイメージは、どうしても出てくると思います。

県外、国外からお越しになる方は、一番大きな問題は住むところですね。ですから、お越しになった方は、日本人とか外国人とか区別しないで、困っている青年たちに、それなりの理由をつけて、1年間は、そこを寮にすると。あとは自分で見つけなさいと。あるいは各大学にお願いをするというようなことであります。

そういう意味で、ここは入り口ですけれども、なるべく交通費がかからない方が良いでしょう。バスを使う、電車を使うというよりも、電車は差し当たって使うけれども、そこからの歩いて行ける距離に、それなりのものがあると。グランシップがある。それから、球場がありますし、その球場のところに、内藤先生につくっていただいた最高級の体育館もございまして、動物園もあると。上に上がれば、SPACという演劇集団の、いわばギリシャの演劇を日本に移したような、野外のすばらしい演劇場もあるし、グランシップそれ自体に演劇のがあります。これは非常にレベルが高いということですね。国際交流基金から、今度は特別にお金をもらって海外に行くということでも、その地位を完全に確立しました。実は静岡パフォーミングアーツセンターという専用の劇場がグランシップの東京側のところにあるわけです。そして、頂上には最高級のホテルがあります。日本平のことですけれども。今度、いわゆる展望施設ができ上がりつつあって、そこから、今日来ておられませんが、酒井さんの会社と一緒に、三保松原の方にすーっと5分で、ロ

ープウェイ、ゴンドラ、ケーブルでさっと下りられるというところがあって、もうそこは、三保松原の世界です。ですから、天上界への入口の三保松原から、天上界と地上を結ぶ、360度展望できる日本平の頂上。そして、こちら、内陸側におりてくると、東静岡というところに来られると。こういう、全体の構想があって、その周りに、今度は自然、地球環境史ミュージアムというのも、この3月26日にオープンいたします。本当にこれは、色々と若い青年たちが、立派な先生方とともにする。

こちらが商業の町だと。これは城下町ですから。そして、あちらはもう、いわば学生街だと。そういうイメージが、一応ここの基本構想の中に出ているかなと思います。

ただ、冒頭で、何人かの先生が言われましたけれども、この内陸側ですね。ここは市がやっている。こちらは県だということがありまして。本当は1つでやると一番いいのです。知らぬうちにローラースケートというふうに決まってしまう。これは、ずっと、横のいわゆるコンコースのところは、3階の高さですから、もうすばらしい眺望なんです。振り向けば、もう富士山なんです。そういうところ、そののところが考えないまま、突然、ローラースケート場になってしまい、がっくりきております。

それから、実はグランシップについて、もちろんオペラも、それからオーケストラも邦楽もなさっておられますけれども、基本的に多目的なんです。したがって、実は、真に響きの良いというもの、ホールではありません。ただ、前の館長先生が、2,000名弱入る中ホールというのがありまして、そこも演劇用の中ホールだったのです。ですから、響きが、演劇用と音楽で違いますので、かなり工夫されていて、一応、トップクラスのオーケストラが来ても、それなりに聞けると。ただ、後ろの方に行くと音は抜けていきます。ですから、多目的なので、あるいは基本的に演劇用につくられているということがあります。したがって、実は、本物のオペラを入れるオーケストラピットがあって、ちゃんと舞台があってというところはないのです。だから、宝塚も来られないわけです。あれもオーケストラがあるでしょう。ですから、私は、もし可能なら、これは、先ほど野知部長が言ってくれた、こういう絵がありますね。この絵の中に、全体、例えばグランシップの東京寄りのところに、何の変哲もない公園ができてしまいました。実はグランシップと、今後の我々の「文化力の拠点」の間に、芝生広場があります。あそこは、実は、仮に、東京側が演劇の文字どおり専用のホールだとすると、こちら側に、2,000人入る音楽専用のホールをつくろうと思えばつくれます。練習用もちゃんと整備できたんですね。そういうものをつくれると。そして、真ん中のグランシップは、いろいろな多目的なものができるので、

そこは国際会議であるとか。

【伊藤会長】 なるほど。

【川勝知事】 そういうようにすると、絵は描けるのですが、音楽については、実は、今、先生言われましたけれども、もっと大事にしなければいけないのですが、非常に中途半端にしか考えられていないというのが、東静岡における状況です。

【伊藤会長】 ありがとうございます。

大体、イメージが、色々な先生方と知事のお話を混ぜ合わせると、何となく、ある方向が出てきたような気がするのですけれども。問題は、先生、どんがらは、こんなやつではないでしょうか？

【内藤委員】 どんがらとは？

【伊藤会長】 建物。どんがら。こんなものではないですよ。

【東委員】 先生、よろしいですか。

【伊藤会長】 はい。何ですか。

【東委員】 もう時間がないので一言だけ。

さっき、野知部長がお話した資料について。建物の建設について説明させてください。

【伊藤会長】 これはちょっと、「文化力の拠点」にはそぐわない絵姿だと思いますよ。資料4の絵姿はあまり良くないです。

【東委員】 景観の、外部空間の定義をしている資料7についてですが、今日、資料4を読んで、施設のゾーニング・イメージがたたき台ということで出されています。以前から、この古代東海道を生かした広場の線路側を生かすことで、南側に建てる計画になっていますが、この資料で南側のところを見ていただくと、現在の富士山眺望は、ここから一番よく見えます。ですから、南側に寄せて、施設の、今、内藤先生にお話の、建物の大きさが出されていらっしゃるの、富士山眺望を配慮して考えていただくことが必要であると思います。

【伊藤会長】 真っすぐですか。真っすぐ。

【東委員】 真っすぐに。

【伊藤会長】 そうですか。

【東委員】 富士山眺望はどこからでも見えるかという、そうではなく資料7の黄色く色で塗られたところからしか見えません。もちろん、3階の通路から富士山眺望ができますということで、アナウンスしていけば良いかとも思うのですが。現時点では、この景

観軸の上にあります、黄色い部分が、富士山眺望エリアです。

【伊藤会長】 一番良いんですね。

【東委員】 ここが一番良いというか、この場所からしか見えなくなっています。

【伊藤会長】 大体わかりました。はい。

【東委員】 そういったことを踏まえて、やはり、別のところに視点場をつくる、眺望地点をつくるというならば良いのですが考えてください。

【伊藤会長】 いや、これはちゃんと誘導尋問でね。

【東委員】 考えていただきたいということでは、東静岡駅の一番の景観的な問題は、この線路際の物々しさです。

【伊藤会長】 それはそうなんです。これは、行ってきました。

【東委員】 ここを配慮しないと、鉄道の騒音もありますし、空間的にもよりよい景観は生み出せないと思います。

【伊藤会長】 これは、これからの話題ですね。

【東委員】 はい、そうですね。よろしくお願いします。

【伊藤会長】 はい。

これは、容積率的には、県の提案は幾らでしたか？

【企画広報部長】 2万4,000平方メートルで、500%ですと12万平方メートルです。

【伊藤会長】 違う。今の提案、県のは容積率が大体140%ぐらいですか？敷地面積が2万4,000平方メートルで、床面積が3万幾らですよ？

【企画広報部長】 今、3万3,000平方メートルです。

【伊藤会長】 そうですね。だから、要するに150%ですね。

【企画広報部長】 はい。

【伊藤会長】 それでも大きいんです。私のイメージでは。

【東委員】 今、ここの駐車場スペースがありますが、駅の近くの景観コアが記載されています。今の駅前広場からは、正面にコンコルドが見えます。駅前空間を一緒に再編していくということを考えると良いと思います。

【伊藤会長】 そうですね。はい。

【東委員】 空間が生まれ駅前に新都市拠点の景観コアとしてできてくると思うので、配慮していただき条件の1つとして考えてください。

【伊藤会長】 それはこの次、もう1回、皆さんと広く議論しましょう。

【東委員】 はい。ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

【伊藤会長】 内藤先生、建物はどんなイメージですか。

【内藤委員】 何か、色々メニューはそろってきて、見えてきたかなという気はします。それで、少し意見ですが。この、何というか、施設がある、資料4です。

【伊藤会長】 資料4。はい。

【内藤委員】 それで、これは、大体どういように入れたら良いかというスキームが書いてあるのだけれども、いかにもかたいかなという感じがしています。それで、多分、委員会のステップとしてはこれで良いと思いますが、私は、案外、この図書室と書いてある、この4階がこれでは小さいかなと思います。

【伊藤会長】 座って50ですか。

【内藤委員】 学生は最近、TSUTAYAもそうですけれども、やたら何か勉強したり研究したり、そういううろうろする場所がありますよね。駅の近くにそういう場所があったら、学生はうれしいかなと。それから、近所の奥さん方もうれしいかなという、そのような感じがしました。そこで食事もできるとか、わりとそういうマルチな感じのスペースが、東静岡の売り物としてあると良いのではないかと。そうすると、スポーツ施設で、帰りに少しコーヒー飲んで帰るとか。何かそういうような、色々なことが可能なんじゃないかと。だから、この4階というのが、すごく大事になってくるのではないかなと思います。

あと、このスキームでは、上に12階まで積んでいますけれども、ワンフロアが2,000平方メートルというのが、少し私は小さいような気がするのです。

【伊藤会長】 はい、企業階でね。

【内藤委員】 ええ。森ビルが、六本木ヒルズが1フロア5,000平方メートルなのですね。大体、5,000平方メートルというのが、何か1つのスタンダードになりつつありますので、もう少し広めにしておかないと、単一機能を入れてそれで終わりになってしまう、非常にシステムティックになり過ぎるような気がするのです、それが少し気になりました。

【伊藤会長】 なるほど。分かりました。

ほかに。時間がそろそろ予定なので、御発言ございませんでしょうか。

今日は積極的に御発言いただいて、それも話題が拡散しないで、かなりこう、ある方向

へこう行ってきて、何となく、事務局も今の話を聞きながら、イメージができ上がってきているのではないかと思います。もう1回これを、私も関わりますけれども、内藤先生が言ったのはこういう意味だというような、これを書き直して、それで、やはり食べ物というのは大事ですね。食べ物と若者とおかみさん。3点セット。これを合わせれば、何とかなるなど。それで、1階、2階、3階の辺りをこう、混ぜ合わせていけば。これの、7階から上はつまらないですよ。この数字は。いつでもできるんだから。特別応接室とか、レストラン、カフェ・バー、業務オフィス、ビジネスインターン向け、必ずしもここになくたっていいんです。

【寒竹委員】 少しよろしいですか。

【伊藤会長】 はい、どうぞ。

【寒竹委員】 多分これ、図書室とか講義室って、「室」になっているのですが、例えば、閑谷学校なんていうのは、講義講堂という1つの堂があって、それが庭にオープンになっているわけです。そういう、外からも見えて、その機能が入っているというような、今、部屋、室って考えちゃうから、ちょっと窮屈になるわけです。

【伊藤会長】 そうですね。

【寒竹委員】 全て、昔のお「堂」じゃないですが……。

【伊藤会長】 「堂」ですね。

【寒竹委員】 庭と、必ず外部空間と一緒にするような、堂と言いますかね。

【伊藤会長】 堂ですね。

【寒竹委員】 そうすると、地中海みたいなもので、ここは雨も少ないですし、逍遥派と申しますか、そういう、昔の図書館はほとんど庭だったわけですので、それで歩きながら考えるわけです。特にこの、静岡の風土から言ったら、それがぴったり合うような、お堂的なものが、こうあるというような感じで考えるのも良いかなと。

【伊藤会長】 そうですね。良いですね。

【寒竹委員】 はい。

【伊藤会長】 それでは、今日はこれぐらいのところで収めておきましょう。

内藤先生、どうもありがとうございました。

寒竹先生、どうもありがとうございました。

最後、建築感的に、非常にヒントになるお話を、2人の先生から伺いました。

事務局、今日はこれでよろしいですか。

【企画広報部長】 それでは、会長、並びに委員の皆様方、長時間にわたりましてありがとうございました。

では、閉会に当たりまして知事から御挨拶を申し上げます。

【川勝知事】 どうも今日は3回目となりまして、さすがに内藤先生からも具体的なイメージが湧いてきたということで、建築家がそういうと言われるというのは、大変ありがたいことですが、ただし、冒頭に、伊藤座長の方から、まずはどういうようにしたら人が集まるのかと。あるいは人が集まっているというイメージがまだ湧かないという、厳しい御意見がございました。ですから、もう少し固めないといけないということで、これは、夏までにあと2回ぐらい、本当に申し訳ありませんけれども、来ていただきまして、そして具体的な絵を描きまして、来年の当初予算、すなわち今、議会が終わったばかりでございすけれども、この時期に、予算を組むというような、そういう時間的段取りでやっていきたいと思っております。

どうせつくるなら、間もなく、ワールドカップだとかオリンピックだとか、等々がございまして、どんどんと人がこっちに来ているので、若者に対しては、おーっと言われるようなものをつくり始めるということがとても大切でございます。

そんなことで、今日は私も聞き応えがあったかなと。いつもの会議でもそうなのですが、色々と教えていただきました。ありがとうございました。これを無駄にしないで、次回の会議に生かして、また先生方にもんでいただくというようにしたいと思いますので、何とぞよろしくお願いを申し上げます。先生方、ありがとうございました。

【伊藤会長】 どうもありがとうございました。それでは、今日はこれで。終了します。

【企画広報部長】 以上をもちまして、第3回の専門家会議、終了といたします。ありがとうございました。

— 了 —